

外国人にとっての〈富士山〉

白幡洋三郎

フジヤマは、ゲイシャと並んで、外国人が抱く一般的日本イメージの代表だとよく言われてきた。だが富士山だけをめざして日本を訪れた外国人は、少数だろう。とはいえ日本訪問の目的の一部に、富士山を見ること、富士山に近づくとかあるいは登ること、まで組み入れていた人物がいることも確かである。じっさい外国人が書き残した日本旅行記、日本見聞記のかなりのものに、富士山の記述があらわれる。しかもそこには富士山の図が、じつに数多く掲載されている。図の数は、日文研が収集した本の中でも 200 種を越すだろう。大ざっぱに言って、3～4 冊のうち 1 冊にはかならず富士山の図が載っている。

正確に言うと、このシリーズで対象にしているのはおもに 1850 年代から 1900 年頃までのあいだに、日本に関して出版された書物である。この時期、著者たちは日本を訪れるのに船を利用するしかなかった。

彼らが日本に最初に上陸するのは横浜、ついで長崎、さらに少数だが

神戸だった。西から日本をめざすと、上海を経てまず長崎に入港する。しかし長崎を素通りしてそのまま横浜へ向かう便もあった。だからアメリカ大陸から太平洋を横断して日本をめざす場合は、ほとんど横浜が最初の日本上陸地点だった。

そこで到着前に海上からまず見える日本の陸地は、晴れていればほとんどの場合、高くそびえる富士山になった。そのときの印象は、日本見聞記・旅行記に多数あらわれる。その典型は、次のような叙述にみられる。

「甲板では、しきりに富士山を感嘆する声がするので、富士山はどこかと長い間さがして見たが、どこにも見えなかった。地上ではなく、ふと天上を見上げると、思いもかけぬ遠くの空高く、巨大な円錐形の山を見た。海拔 13,080 フィート、白雪をいただき、素晴らしい曲線を描いて聳えていた」(イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社)

バードは、イギリスの婦人で旅行家。アメリカ太平洋岸から 18 日間に及ぶ航海を経て日本の陸地をはじめて望見したのであった。1878 (明治 11) 年 5 月 20 日の早朝のことである。誇張があるにしても、こんな記述から、日本イメージを富士山に求める心情が広まっていったことが想像できる。

バードより 8 年前、お雇い外国人として日本にやってきたアメリカ人のグリフィスの記述は次のようなものだ。1870 年の 12 月 29 日早朝のことである。

「はるか遠くに雪の衣服を着た山の女王が澄みきった空気のため、思

い違いをするほど近くに見える。その山はすでに朝日の冠を戴き、その額はまだ昇りきらない太陽の最初の光線で金色に光っている。その向うには紫色の空が広がり、宝石のような星がまばたく。山の女王の胸は刻々変る色に震えている。海の沖からではまだ陸地がはるかに認められないずっと前から、…この比類のない円錐形の山は眺められ愛される。これほど完璧で、これほど一生忘れがたい眺め、一目で栄光と新鮮を強く感じさせる自然の傑作という評価をひき起こすのに、これほどふさわしい眺めは、おそらく近づく汽船から望む富士の姿以外にないであろう」

(W.E. グリフィス『明治日本体験記』山下英一訳、平凡社)

こんな印象記を読んだ人々が、同じような体験をしてみたいと願うことは十分に考えられる。私だってこんな光景を見てみたいと思う。海上からの経験はないが、じつはある早春の朝、伊丹から羽田に飛んだとき左側の窓側の席を頼んで取ったことがある。このルートは名古屋上空から遠州灘を経て左に旋回し、海側から羽田に着陸するのを知っていたからだ。快晴の太平洋上空からの富士山の眺めは「われを忘れる」という表現が誇張でないほど感動的だった。

私の感覚は余りひねくれていない、というかナイーブにできていて、人が「良い」という風景には、たいていなるほどと同調する。そのためか、お節介焼きになることもある。ある時、アメリカからの帰り、成田から伊丹に飛んだ。このときは、右手に富士山が見えるルートだから右側の席を取っていて、天気も良し、はるかに見下ろす富士山が見事だっ

た。そこですぐ近くにいたアメリカ人らしい男に「あれが富士山だよ」と、頼まれもしないのに教えた。この青年が、空いている席にぼらぼらに腰掛けていた周囲の連中にこのことを伝えると、2～30人の同年齢くらいの男たちがどっと右側の窓の席に集まってきた。あとで聞くと岩国基地に初めて赴任する米軍の青年たちだった。100年の時間を経て、私は新しい「フジヤマ」賛美者を増やすことに貢献したかもしれない。

銅版画や石版画が印刷の主流だった開国直後の時代、挿絵の中には奇妙で不思議な富士山の姿がよく現れる。まだ現物を見た人が少なかったからでもあろう。外国人にとっての富士山は、なかなか想像力に富んだ日本イメージを支えていた。しかも特徴的なのは、初期の富士山の図は、ほとんどが海から眺めたアングルになっていることだ。じっさい富士山の近くに行き、また富士山に登るという旅行は、1899年に外国人の日本内地旅行が自由になるまで、簡単なことではなかったからだ。外国人の日本旅行記・見聞記には海上から眺めた富士山の第一印象が図に載せられていると考えてよい。富士山の姿が外国人の手で多数描かれ、また富士山に近づく旅行も頻繁に行われるようになり、しかも写真が普及するようになってくると、奇妙な富士山の姿はしばみはじめる。寂しい感じがしないでもない。